
魔法少女リリカルなのはStS THE ABYSS ~使用人と懐刀~

雷網

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStS THE ABYSS ～使用人と懐刀～

【Nコード】

N8994G

【作者名】

雷綱

【あらすじ】

J・S事件から一年後、機動六課のメンバー達はそれぞれの道を進んでいた。変わった格好の二人の男…そして暗躍する謎の組織…果たして、機動六課のメンバー達、そして、ミッドチルダの運命はどうなる…？ テイルズオブジァビスとのクロス作品です。タイトルを見たら分かる通り、ガイとジェイドがメインです。

第1話 プロローグ（前書き）

初めての投稿なので失敗等あると思いますがよろしくお願ひします。
あと、僕は英語が苦手なのでデバイスの言葉は日本語にさせて下さい。

第1話 プロローグ

「流石に、この状況はきついな…。」

と、ガイはつい口走ってしまった。

それもその筈、今現在彼は戦闘中であり、しかも周囲を敵に囲まれていた。

「そうですね、これは少し厳しいかも知れませんね。」と、言っているものの、ジエイドにはかなり余裕があるように見え、しかもこの状況を楽しんでいるに見える。

「…アンタ、今この状況を楽しんでるだろ…。」

「いえ、そのような事はありません。」ガイが呆れながら聞くと、ジエイドの楽しそうな返事が返ってきた。

「…こっちは一刻も早くルーク達と合流しなきゃならないっていうのに…全く、アンタって人は…。」

そう、彼らとはある事情でマルクトの首都、グランコクマに向かう途中で敵の襲撃を受け、戦っている途中でルーク達とはぐれてしまったのだ。

「オマケに、この霧のせいで見通しが悪くて仕方がない」

「…確かに、この霧は少々厄介ですね」

ガイ達は今現在、周囲を敵に囲まれ、さらに謎の霧によって、視界を奪われている。幸い、敵の姿は確認出来るので戦闘自体は問題無いのだがルーク達を探す事は出来そうもない。

…最も、周囲を囲まれているので探しに行く事態が出来ないのだが…

「早いとこ片付けてルーク達を探さないとな」と言ってガイは剣を構えた。

「仕方ありません、譜術で一気に蹴散らしましょう」

「…初めからやってもらたかったんだがな…ってちよっと待て！」

ジエイドが譜術を使おうとした時、ガイが何かに気づいた。

「？、ガイ、どうかしま…！？」

不思議に思ったジエイドがガイに聞こうとした時、彼も気づいたようだ。

「何です…あれは…？」

「こつちが聞きたいんだがな」

ガイ達が見たもの…それは真紅に輝く謎の光だった。周囲の敵も気づいたらしく、そちらを見ている。ガイ達が暫くその光を見ていると、突然その光が強く光った。

「！？おい…なんかヤバそうだぞ！」

「不味い、このままでは…」

謎の光はさらに強くなり、そのままガイ達を飲み込んでいった…

第1話 プロローグ（後書き）

ここまで読んで頂きありがとうございます。「リリカルなのは」なのにテイルズだけになってしまいました。第2話からは「なのは」を入れていこうと思います。

第2話 再会、そして始まり（前書き）

遅くなつてすいません。第2話です。

第2話 再会、そして始まり

「…ん…俺は…気を失ってたのか?…」

謎の光に飲み込まれ、ガイは気を失っていた。そして意識を取り戻し、辺りを見渡して、ため息をついた。

「…ジエイドともはぐれちまったし…それにしても、ここは何処だ?」

そこは森の中だった。そして、ガイには見覚えのない森だった。

「とりあえず、歩くか…」そう言うとガイは森の中を歩き初めた…。

所変わって

ミッドチルダ・元機動六課隊舎前…

そこに、元六課のメンバーが集まって、久々に顔を合わせ雑談に華がさいていた。今日はこの思い出の場所で同窓会を開こうとしていた。しかし…

「スバルさん、遅いですね…」

時間になっても現れないスバルにエリオが言葉を漏らした。

せつかくの同窓会なのだ、どうせなら皆揃ってから初めたい。しかし時間が過ぎてもスバルは一向に現れない。

「全く、何やってんのよ、アイツは…」

ティアナが少し怒気を含んだ声でそうこぼすと、

「ごめんなさ〜い!」

スバルが走ってきた。皆の所に来た元相棒にティアナは

「遅い!アンタ何してたのよ!?!」

と遅れた理由を聞いて見た。

「いや…その…ちよつと寝坊しちゃって…」

「アンタこの大事な日に寝坊するってどういうことよ!?!」

「だって〜明日の事考えてたら、楽しみでなかなか寝られなかった

んだもん」

「子供か、お前は！」

等と言う二人のやり取りを見ていたはやては、「あの頃となんも変わつとらんな」

と思っていた。

「二人共、そこからやめてこっちにおいで」

なのはが呼ぶと、二人がこちらにやって来た。

「久しぶりだね、スバル。元気にしてた？」

「はい！なのはさんこそ、元気そうで何よりです。」

「うん、私も皆も元気だよ。」

となのはとの久々の会話の後、スバルははやての所に行き、

「八神部隊長、その…遅れてしまって申し訳ありません。」と言って頭を下げるとはやては、

「ええよ、そんな事せんでも。それにもう部隊長やあらへんし。」

と言いつつ皆の方に向き直り、

「それじゃあ、皆揃った事やし、パ〜といこうか！」このはやての言葉で、元機動六課のメンバー達は宴会を初めた。

機動六課のメンバー達が宴会騒ぎをしている頃…

森の中を歩き、森の出口らしき周りより木が少なく、広い場所にてたガイが見た光景は今までに見た事ない物だった。

「おいおい…何だよこれは…」

ガイが見た物、それは…

巨大な都市だった。

しかし、ガイが驚いたのは街の巨大さではなく、その街にある物だった。

「何だあれ…何で馬車が勝手に動いてるんだ？」

それはこの世界の人から見たら何でもない自動車なのだが、もちろんガイは知らない。

「とりあえず、あそこに行ってみるか」

ガイがそう言って歩きだそうとした時、森の中、つまりガイの背後からそれは現れた。

「ッ！何だコイツらは！？」ガイは剣を構え、襲撃者を見た。ガイの周りには円形の体を持つ、奇妙な物体が5体いた。

「魔物か？…しかし、こんな奴ら見た事がない…」

ガイがそう考えていると、襲撃者はセンサーらしき部分を黄色から赤に変えてその部分から光弾を撃ちだした。

「いきなり攻撃かよ！だったら…」

ガイは相手の攻撃を全て回避すると、反撃にうつてでた。ガイは正面の2機に接近するべく、駆けた。それを阻止するかの様に光弾を撃とうとするが、それよりもガイの方が速かった。

「遅い！孤月閃！」

あたかも月を描くような斬り上げと斬り下ろしの二段技に襲撃者は綺麗に真つ二つにされた。ガイは残った敵の方を向きなると、それらを睨み付け、剣を向けた。

「さあ…次はどいつだ？」時間は少し遡る。機動六課隊舎前での宴会騒ぎは更に大きくなっていった。なのはを除く成人達は酒を飲みまくり、はやてにいたっては

「足りん！全然足りん！もっと持ってこい！」

等と言う始末だった。一方の未成年組は飲み物が酒ではないため、酔ってはいなかったが、こちらも凄い事になっており、

「ちよつとスバル！アンター一体だけ食べる気よ！？」

「ふあっへ、ほおいひいんふあほおん（だって、美味しいんだもん）

」

「食べながら喋るな！何言ってるのかわからないでしょ！」

相変わらずのスバルの大食いに怒鳴るティアナ。そして、

「どうしたの、キャロ。もっと食べたら？美味しいよ」

「…エリオ君、食べ過ぎだと思けど…」

「うん、そうかな？」確かにキャロは余り食べていない。しか

し、それは大食いのエリオから見た量であり、普通の人から見たら十分な量である。スバルとエリオ、この二人はその体のどこにその量が入る？というぐらいの量を楽に平らげる。今日はいないが、スバルの姉ギンガも同様である。そんな中、成人達の中に入らず、なのは少し後悔していた。

「ヴィヴィオやユーノ君も連れてくれば良かったかなあ？」

それは、最愛の娘と幼なじみの事だった。なのはは初め、二人をここに連れてくるつもりだった。しかし、ユーノがそれを断り、

「久しぶりに皆に会えるんだからゆっくりしてきなよ」

と気を使ってくれ、ヴィヴィオの相手をしてくれている。しかし、やはり自分一人でゆっくりなど出来なかった。どうしたものか、と一人悩んでいると、突然通信が入った。

「えっ…緊急通信？」

この時のなのはは知らない。この通信が後に起こる、大きな事件の始まりだという事を…

続く…

第2話 再会、そして始まり（後書き）

何か気になる終わり方ではないです。なお、学校のテストがあるの
で暫く投稿出来ません。すみませんがよろしく願います。

第3話

出会い、そして動き出す歯車（前書き）

投稿が遅くなってしまいました。その分、少し長めです。

第3話 出会い、そして動き出す歯車

「なのはさん、どうしたんですか？」

「ちよつとね…緊急通信がきたの」

こちらにやって来たティアナに通信がきた事を知らせた。その内容は…

『ミッドチルダ郊外の森にガジェット反応あり。至急現場に急行せよ』との事だった。

「ッ…早く八神隊長に…」そう思い、振り返ったティアナの動きが止まった。

「?、どうしたの、ティアナ」

「なのはさん…あれ…」

そう言つて指をさすティアナ。なのははその指の先は見て、啞然とした。なのはとティアナが見たもの、それは……

酒を飲んで酔いつぶれたはやて、そして未だに宴会騒ぎを続けるフイトやヴォルケンリッター達（特にヴィータ）、その他元六課のメンバーだった。今から戦闘が出来るようには見えない。

「…どうします、なのはさん」

「はあ…しょうがない、私は現場に向かうから、ティアナは後からスバル達と来て。」

「はい、解りました。」

「ごめんね、せつかくの休日にこんなことさせて…」

「いえ…お気になさらず。では、私はスバル達に事情を伝えて来ます。」

「うん。ありがとう。」

「では…」

そう言つとティアナは敬礼をしてスバル達の所に向かった。

「さて、私達もいこうか。レイジングハート」

『はい』

「セツト、アップ！」

『スタンバイレディ、セツトアップ』

桃色の光に包まれ、白いバリアジャケットを纏うのは。

「高町なのは、行きます！！」

「コイツら、次から次へと…」

ガイは悪態をついた。初めは五体だった敵―この世界ではガジェットと呼ばれる物―は何処からともなく、次々に現れていた。

「一体なら大したことないが、こう数が多いとさすがにきついな…」
近づいてきた一体を切り捨て、距離を取った。

「さて…どうするか…」

その時、ガイの背後から一体のガジェットが迫ってきた。何時もガイなら苦もなく避けていただろう。しかし大量のガジェットとの戦闘でガイは疲弊しきっていたため反応が遅れた。

「ッ！しまっ…」

「…瞬迅槍！」

ガジェットがガイの背中を撃ち抜こうとした瞬間、ガジェットは風を纏った槍に貫かれた。

「…この技、まさかジエイドか！？」

「どうやら間に合ったようですな」

ガイの背後、ガジェットがいた場所とは反対の方からジエイドが出てきた。

「助かったぜ、ジエイド！…だが、タイミングが良すぎないか？」

「ええ、少しばかり見ていました」

「…何時からいた？」

「そうですね、ガイが囲まれた辺りですかね」

「ほとんど最初からじゃねえーか！」

さらっと問題発言をするジエイドにツッコむガイ。しかしジエイドはそれを軽く流すと表情を引き締めたものに変え、残ったガジェットに向けた。

「とりあえず、あれを片付けましょう」

「ああ、わかった」

「私が譜術で一気に片付けます！ガイは援護を！」
「了解！」

返事とともに駆け出すガイ。そしてジエイドの足元に緑色に発光する円形の魔方阵が現れた。

「ガイ！離れなさい！」

ジエイドの合図でガジェットから離れるガイ。

「雷よ…刃となりて敵を貫け…サンダーブレード！」空に暗雲が立ち込め、雷が鳴り響いた。その暗雲から雷を纏った巨大な剣がガジェット目掛け、飛来した。剣はガジェット群の真ん中に突き刺さり、ガジェットに凄まじい威力の雷を叩きこみ、その活動を停止させた。
「まあ、こんなものですかね」

「相変わらず、アンタの譜術の威力は凄いな」

あの威力の譜術をこんなものと言つてのけるのは、ガイの知る限りジエイドしかない。

「なあジエイド、一つ聞いていいか？」

「为什么呢か？」

「アンタ、此処が何処だかわかるか？」

「…確証はありませんが…おそらく、此処はオールドラントではないと私は思います」

「本当か、それ…」

「あくまで推測ですが」

ここで二人の会話は途切れた。此処はオールドラントではない、その言葉にガイは驚きを隠せない。二人は暫く黙っていたが、その沈黙をジエイドが破った。

「…此処にいても何も変わりません。あの街に行つて見ましょう」

「…ああ、そうだな」

二人がそう言つて歩き出そうとした時、

「…待つて下さい！」

声が辺りに響いた。二人は足を止め、声のする方を見た。そこには…

白いローブのようなものを着た女性が空中に浮かんでいた…
時間は少し遡る。

なのはは全速力で現場に向かっていった。と、そこへ通信が入った。

『ガジェットとの反応が減少しています。それと付近に民間人らしき反応があります!』

なのはは通信を聞いてますます急がなければと思った。ガジェットが減っているとはいえ、民間人に被害がないと言い切れない。

(急がないと…)

現場にはあと数分で到着する。あと少し、そう思った時、なのはは異変に気が付いた。

「…さっきまで晴れてたのに…」

なのはの言う通り、さっきまで雲一つなかった空が、今は黒い雲に覆われている。しかしなのはは気にせず現場に向かった。

なのはが現場に着いた時、ガジェットの数はゆうに二十を越えていた。ガジェットの先には報告にあった民間人らしき人物が二人いた。
「ッ! レイジングハート!」

『ALL right』

なのはは二人を助けるため、攻撃をしようとした。

…が、そこでなのはは気付いた。二人の内の一人の足下に魔法陣が展開されていたからだ。しかも見たことがない魔法陣だ。

「何、あの魔法陣。ミッド式でもベルカ式でもない…」

その時、空の雲が割れ、青い雷を纏った巨大な剣が現れた。なのは突然の事に啞然とした。剣はそのままガジェット群の真ん中に突き刺さり、辺りに電流を流し、ガジェットはその電流に巻き込まれ、次々に機能を停止させた。

「…凄い…あの数のガジェットをたった一撃で…」

なのは暫くその光景を見ていたが、二人がこの場から離れて行くとするのが見え、慌て声をかけた。

「…待って下さい！」

この時、運命の歯車が動きはじめた……

続く…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8994g/>

魔法少女リリカルなのはStS THE ABYSS ~使用人と懐刀~

2010年10月9日00時23分発行